

神宮外苑の鳥類相——朝6分間のバードウォッチングから——

伊藤 洋文
Hirobumi ITO

要旨

朝の通勤時を利用して、約20年間にわたり神宮外苑における鳥類相を調査した。調査はラインセンサスの手法を簡略化し、地下鉄銀座線外苑前駅から國學院高校までの約450mをおよそ6分で歩いて、観察した鳥類種をカウントした。調査ルート上と本校敷地内では、これまで19種の鳥類が観察されているが、その中でも、キジバト、オナガ、ハシブトガラス、シジュウカラ、ツバメ、ヒヨドリ、メジロ、ムクドリ、スズメ、ハクセキレイ、ドバト、ワカケホンセイインコの12種が神宮外苑でよく出現する種であることが明らかとなった。そして、2700回近い調査で得られたデータをもとに、これら主要12種における、年、月、季節、天候等による出現状況を分析した。

はじめに

私が勤務している國學院高等学校は、東京メトロ、銀座線の外苑前駅から徒歩5～6分の、交通の便のいい場所に位置している。周辺には、秩父宮ラグビー場や神宮球場、都立青山高校、TEPIA（先端技術館）などの施設があり、商店も多く、日頃から人通りの多い環境である。また、外苑前駅から國學院高校まで至るスタジアム通りの東側、約300m離れたところには、有名なイチヨウ並木がある。その周辺にはイチヨウ以外の樹木も多く、さまざまな鳥類が生息している。イチヨウ並木に比べるとスタジアム通りは緑が少ないが、年間で何種もの鳥類を観察することができる。私は、朝の通勤時を利用して、バードウォッチングを続けている。これまでの記録をもとに、神宮外苑の鳥類相についての観察結果をまとめた。

第1章 調査地と調査方法

第1節 調査地の概要

調査地は、銀座線外苑前駅の3番出口からスタジアム通り東側（学校に向かって右側）の歩道を歩き、神宮球場前の横断歩道を渡って、國學院高校の本館校舎に入るまでの約450mである（図1）。

この駅から学校までの道のりを、環境の違いによって大きく三つのエリアに分けると、以下のようになる。

いとうひろぶみ：理科教諭

キーワード：神宮外苑、鳥類相、ラインセンサス

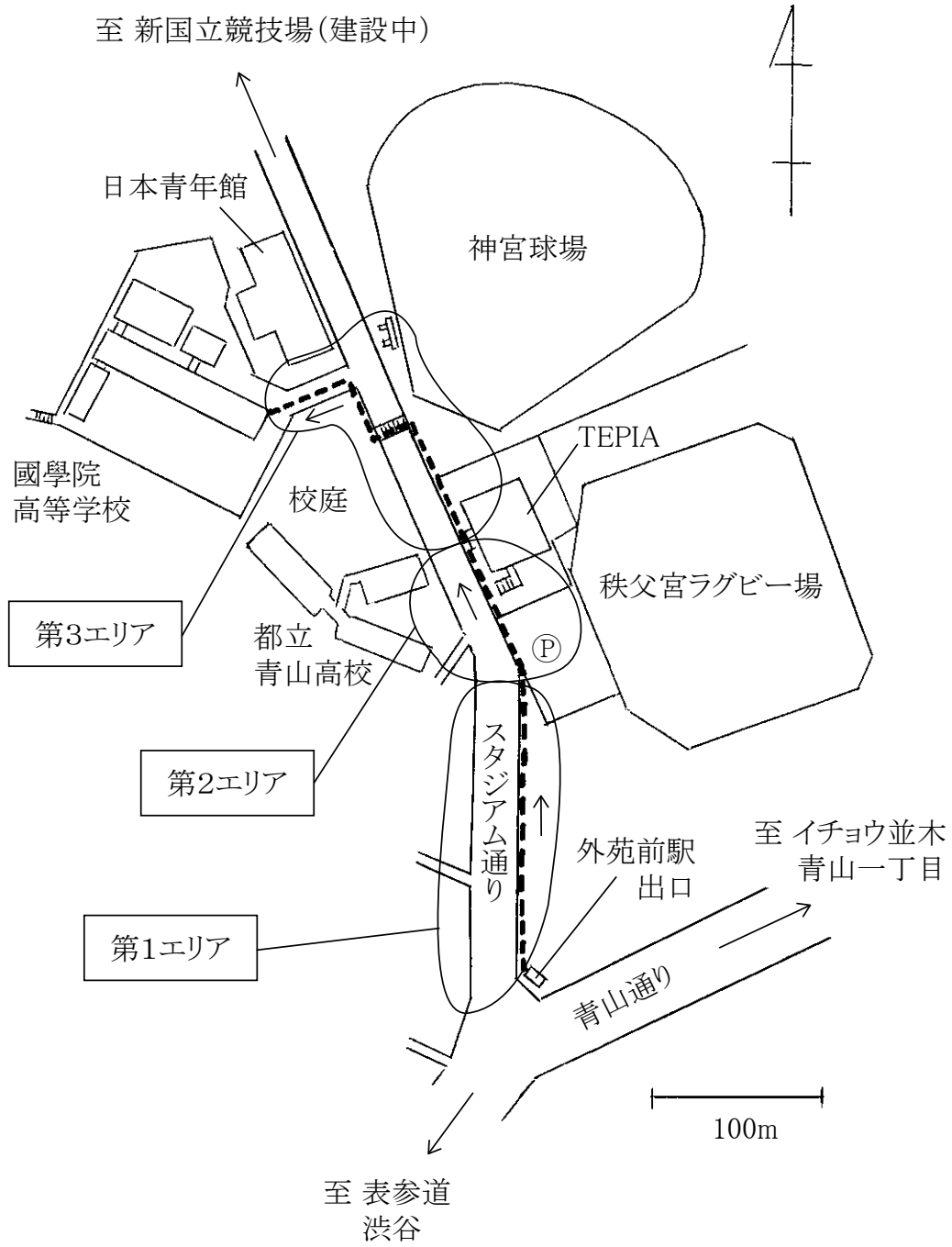


図1 ラインセンスによる調査ルート

〔第1エリア〕 外苑前駅の3番出口から、秩父宮ラグビー場の手前まで（写真1、2）。

この間には道路の両側にビルが建ち並び、典型的な都市部の様相を呈している。屋上緑化をしているビルも一部あるが、街路樹であるアオギリ以外の植物は概して少ない。



写真1 スタジアム通りの左手



写真2 スタジアム通りの右手

〔第2エリア〕 秩父宮ラグビー場から、TEPIA正面入り口まで（写真3、4）。

この間では、通りの右側の建物が減り、ラグビー場の駐車場やTEPIA南側の広場等、空間が大きく広がっているのが特徴である。街路樹のアオギリ以外にも、都立青山高校やTEPIA周辺にはクスノキやケヤキ等数種の樹木が見られる。



写真3 秩父宮ラグビー場



写真4 TEPIA南側の広場

〔第3エリア〕 TEPIA正面入り口から、國學院高校本館校舎まで（写真5、6）。

通りの左側には、都立青山高校の校庭を囲むフェンスと、ハリエンジュやツバキ等の樹木が続いている。一方、右側のTEPIAや神宮球場の敷地内にも樹木が多く、特に神宮球場周辺にはスタジイやツバキ、ケヤキ、『外苑春秋』第3号（2013）の表紙写真に使用したヒトツバタゴなどが見られる。ソメイヨシノやキンモクセイが並ぶ國學院高校の敷地内も含めて、樹種はこのエリアが最も豊富である。また、神宮球場の照明塔も、このエリアにおける鳥類の観察ポイントの一つとなっている。



写真5 都立青山高校校庭フェンス



写真6 神宮球場入り口

第2節 調査方法

鳥類の調査方法として一般的な「ラインセンサス」を、市街地に適するように簡略化して行った。

ラインセンサスとは、調査地を線上に移動することにより、一定地域に生息する鳥類の個体数を調べる方法で、一般的には歩行速度は時速約2kmとされる。歩行ルートの左右25m幅、計50mくらいを観察幅とし、確認した全ての鳥について、種類、個体数、鳴き声がソング（さえずり）かコール（地鳴き）か、出現場所や行動等について記録するというのが通常の調査法である。

しかし、通勤中に行う場合、本来のラインセンサスは調査方法として適していない。まず、足場や見通しが悪い山の中とは異なり、都市部の歩道を歩くのに時速2kmでは遅すぎる。そこで、約450mをゆっくり歩いて6分（時速4.5km）というペースで行った。また、通勤中にペンを持ち、記録を取りながら歩くことにも無理がある。そのため、出現した鳥の種類と個体数などを歩きながら覚えておき、出勤直後にそれを記録用紙に書き込んだ。観察幅についても、厳密に左右25mとはせず、道路両側の建造物、フェンス等に挟まれた範囲とした。ただし、秩父宮ラグビー場のスタジアムまでは距離があるため範囲外とし、その手前の駐車場のみ調査地に含めた。また、ルートからは少々離れるが、神宮球場入口左手の照明塔は、日頃鳥類を目にする機会が多いため、調査地に加えた。

調査は、平成10年（1998年）12月から平成30年（2018年）3月までのおよそ20年間に、合計約2700回実施した。なお、調査を行った時刻は、朝7:30から8:00のうちの約6分間である。

第2章 観察された鳥類種

第1節 出現頻度が高い鳥類種

調査地内では、これまでに16種の鳥類が観察されている。また、調査ルート以外であっても本校の敷地内に出現した種も含めると、19種が確認されている。これら19種のうち、比較的に出現頻度が高い12種について、各種の特徴を紹介したい。なお、種名の順番は、日本鳥学会発行の「日本鳥類目録（改訂第7版）」に従った。

1 キジバト（雉鳩、ハト科、学名*Streptopelia orientalis*）

体はブドウ色を帯びた灰褐色で、翼の上面には赤褐色と灰色の縁があり、うろこ状に見える。首には青灰色の縞模様があり、おしゃれで美しい。「デデッポッポー」という独特の声で鳴く。俗にヤマバトともよばれるが、正式名はキジバトである。ドバトと同様に地上で採餌することもあるが、ドバトのように群れることはなく、単独かつがいで行動する。樹上や、都立青山高校の校庭のフェンス上で見かけるハトは、ほとんどこのキジバトである。第3エリアでの出現頻度が高く、本校の敷地内にも出現する。逆に、第1エリアでは見られない。樹木の多い環境を好むことがわかる。近年出現個体数が増えてきた種である。



写真7 本校敷地内のキジバト（2017.6.1. 第3エリア）

2 オナガ（尾長、カラス科、*Cyanopica cyanus*）

オナガは、その名前の通り尾羽の長い鳥である。体全体がほっそりしているため、とまっているときも飛んでいるときも、とてもスマートに見える。頭の色は黒いが、翼や尾羽が水色をしており、その外見は結構爽やかな印象を受ける。しかし、オナガはカラス科であり、鳴き声まで爽やかとはいかない。「グェーイ、グェーイ」と、かなり騒々しく鳴く。

ところで、かつてオナガは、300m東を通るイチョウ並木では時々見かけることはあったものの、調査ルートであるスタジアム通りにおいては、極々たまにしか見ることのない種だった。それが最近、第3エリア内だけとはいえ、その観察例が増えてきた。都立青山高校校庭のフェンスや、その近辺の樹木で観察されている。



写真8 フェンス上のオナガ (2017.6.16. 第3エリア)

3 ハシブトガラス (嘴太鴉、カラス科、*Corvus macrorhynchos*)

今や都市部を代表する鳥の一つとして揺るぎのない存在が、ハシブトガラスである。調査ルートにおいては、どのエリアでもよく見られ、フェンス上以外の環境条件に出現している。照明塔の上によくとまっているくらいなので、見晴らしの良い場所は好きなのであろうが、フェンスやその細い支柱の上には、体が大きすぎてとまりにくいのかもしれない。第1エリアでは、生ごみをあさっている光景を時々目にする。また、ハシブトガラスは餌を他の場所に運んで食べることもあり、ずうずうしくも本校の植木の上で食べていたこともあった (写真9)。



写真9 本校に餌を持ち込んだハシブトガラス (2017.9.30. 第3エリア)

4 シジュウカラ (四十雀、シジュウカラ科、*Parus minor*)

頬と腹面は白く、背面は青灰色に黄緑が混じり、喉から腹にかけてネクタイのような黒い帯があるのが特徴である。スズメとほぼ同じ大きさの、とても奇麗で可愛い鳥ではあるが、すばしっこく飛び回るため、なかなかゆっくり観察するのはむずかしい。「ツツピー、ツツピー」などと鳴きながら、常にせわしく動き回っている印象のある小鳥である。ちなみに、外苑近辺で見られる主要12種の鳥類のうち、写真撮影のタイミングに最も苦労したのがこのシジュウカラだった。



写真10 本校正門近くのシジュウカラ (2018.1.10. 第3エリア)

5 ツバメ (燕、ツバメ科、*Hirundo rustica*)

春に渡来し、繁殖する夏鳥である。神宮外苑の調査地では、第1エリアではほぼ例年営巣するほか、第2、3エリアでも上空通過する個体を観察できる。4月頃から親鳥が見られ始め、育ったヒナが夏休み中にいつの間にか巣立ってしまうというのが、ほぼ毎年の状況である。

ところで、今までに調査ルート上からツバメの営巣を確認した場所は3か所ある (いずれも第1エリア)。

営巣地A：駅から近い道路左手の、酒屋倉庫の軒下。3か所の中で最も高い場所にあり、人通りの多い道路に面しているため安全と思われるが、近年土台が壊れて以来修繕されておらず、使われていない。かつて『外苑春秋』第5号(2015)の表紙に用いたツバメの写真は、ここで撮影したものである。

営巣地B：調査ルート右手にある焼き鳥屋の下の、駐車場の壁面。高さ的には低い場所に巣があるが、屋内の駐車場の奥にあるため安全である。ほぼ毎年利用されている (写真11)。

営巣地C：調査ルート右手にあるコンビニ脇の駐車場入口。かつては「駐車場入口」と書かれた照明器具の上に隙間があり、そこに巣があった。しかし、ある年から隙間のない照明器具に付け替えられたため、営巣できなくなってしまった。高さ的に最も観察しやすい場所だっただけに、残念である。

なお、センサス調査では親鳥の数だけカウントし、巣立つ前のヒナの数を含めていない。

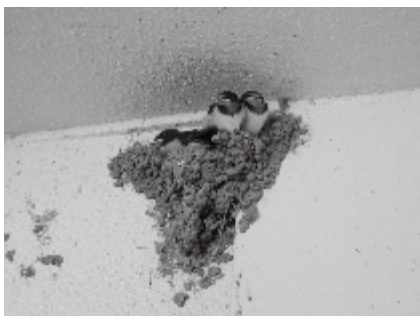


写真11 営巣地Bで親を待つツバメのひな (2014.6.14. 第1エリア)

6 ヒヨドリ（鶇・白頭鳥、ヒヨドリ科、*Hypsipetes amaurotis*）

名前の通り、「ヒーヨ、ヒーヨ」と大きな声で鳴く灰褐色の鳥である。神宮外苑では、夏季に少なく、秋から春に多く出現する。また、第1エリアでは少なく、第3エリアに多い。キジバトと同様、樹木の多い環境を好むことがうかがえる。特に観察個体数の多い第3エリアでは、道路の両側の樹木間を「ヒーヨ、ヒーヨ」と鳴きながら波状飛行して行き来しているのをよく見かける。とまっている場所は樹上やフェンス上がほとんどで、街灯などの人造物にとまっているところは見かけない。また、地上に降りているところもまず見ない。しかし、珍しく本校敷地内の、校舎入口手前に置かれているシクラメンのプランターに降りていたところを見たことがある（2016.2.3）。また、第2エリアにおいて、車にひかれたミカンをついばんでいたのを見た（2018.2.10）。雑食性で、昆虫類を食べる一方、木の実や花も食べ、春には本校のソメイヨシノによく訪れる（写真12）。



写真12 本校のソメイヨシノに来たヒヨドリ（2017.4.12. 第3エリア）

7 メジロ（目白、メジロ科、*Zosterops japonicus*）

スズメやシジュウカラの全長（鳥を仰向けにねかせて嘴を水平にした時の、嘴の先から尾の先までの長さ）が14.5cmであるのに対してメジロは11.5cmと、神宮外苑で見られる鳥の中で最も小さい。体の上面が暗黄緑色で腹面が白いが、外見の最たる特徴は、名前の由来にもなっている目の周囲の白である。メジロは、よく「チー、チー」と鳴きながら、樹木の間を飛び回っている。ツバキ、ウメ、サクラ等の花蜜も好きで、都立青山高校の校庭のフェンス際のツバキや、本校の敷地内のソメイヨシノで見かけることがある。第3エリア内でしか観察記録はない。フェンス以外の人造物にとまっているところを見たことはなく、樹木に依存して生活していることがわかる。その一方、本校の校舎ベランダにメジロの死体があったことが報告されている（2017.11.10）。外傷はなく、ガラスに激突したものと思われる。調査コース外ではあるが、早春に本校の理科館前に植えられたウメが開花するとよく現れ、愛嬌ある姿を見せてくれる（写真13）。ヒヨドリと同様、夏にはあまり見かけず、秋から春にかけて多く目にする種である。



写真13 ウメの蜜を吸うメジロ (2017.3.3. 本校敷地内の理科館前)

8 ムクドリ (椋鳥、ムクドリ科、*Sturnus cineraceus*)

スズメよりも少し大きく、黒っぽい。腰は白く、顔にも白い羽毛が混じる。尾羽が短いため、ずんぐりした感のある鳥である。「キュルキュル」という鳴き声を出しながら飛んでいるところをよく見るが、飛んでいる姿もずんぐりした感じである。また、地上を進むとき、スズメが脚を揃えてピョンピョン跳ぶのに対して、ムクドリはドバトと同じように左右の脚を互い違いに出して歩く。ムクドリは、調査ルート内の路上で見かける一方、都立青山高校のフェンスや神宮球場の照明塔のような高いところにもよくとまっている。照明塔の上では、ムクドリ、ハシブトガラス、ワカケホンセイインコの3種が時々場所取り合戦をしているが、体格からしてやはり他の2種には追い払われることが多いように思われる。ムクドリは、単独やつがいでではなく、群れで行動していることが多い。照明塔やフェンスの上に多くの個体が並んでいるのをよく見かける。



写真14 採餌中のムクドリ (2017.5.27. イチョウ並木入口で撮影)

9 スズメ (雀、スズメ科、*Passer montanus*)

神宮外苑の調査ルートで最もよく目にする鳥がスズメである。神宮球場の照明塔の上では見ることがないものの、その他のどの場所においても出現している。ドバトやハシブトガラスとともに、最も都市部に適応した鳥類種の一つといえる。本校の敷地内でも目にする機会は多く、教室のエアコンの室外機等に営巣している可能性が高い。



写真15 TEPIA脇の広場のスズメ (2017.11.16. 第2エリア)

10 ハクセキレイ (白鶺鴒、セキレイ科、*Motacilla alba lugens*)

本来は川原の鳥であるが、近年都市部へも進出し、外苑でもたびたび観察されている。よく開けた場所が好みらしく、第2エリアにある秩父宮ラグビー場の駐車場近辺で見かけることが多い。長い尾羽を上下に振りながらチョコチョコ歩き、路上で採餌する仕草が可愛い鳥である。体色は白黒2色であるが、若い個体や季節によっては灰色が混じる。「チチッ、チチッ」と鳴きながら波状飛行するのもハクセキレイの特徴である。調査ルートからははずれるが、ハクセキレイは本校の校庭にも出現する。試験中などで生徒のいない静かな校庭を、1、2羽でせわしく歩き回っているのを時々見かけることがある(写真16)。

ところで、ハクセキレイは冬になると大きな群れをつくり、大都会でも集団で眠りにつくことが知られているが、この渋谷区内では、渋谷駅のモアイ像そばの壁面で集団ねぐらを見たことがある。

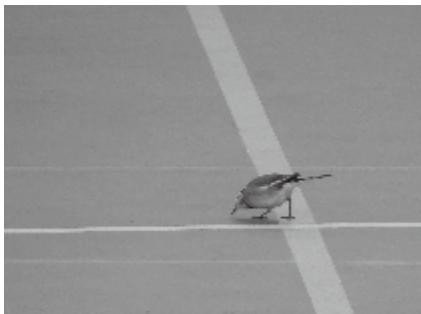


写真16 本校の校庭に訪れたハクセキレイ (2017.12.3)

11 ドバト (土鳩、ハト科、*Columba livia* var. *domestica*)

ユーラシア大陸に広く分布するカワラバト (*Columba livia*) から家禽としてつくられたもので、今では日本で最も一般的に見られるハトである。しかし、本来は日本にいなかった種であり、日本に持ち込まれたのは平安時代頃といわれている。そして、かつては「堂鳩」と書かれていたように、寺社で多く見られる種である。

ドバトは個体変異が大きく、種内での体色の違いが顕著に見られる。外苑前の出口を出てす

ぐ左手のビルのひさしがドバトのお気に入りの場所らしく、よく数羽でとまっている。また、外灯の上にとまっていることも多い。その一方で、道路上で採餌している個体もよく目にする(写真17)。ドバトは、神宮外苑では第1エリアから第3エリアまでまんべんなく出現する。ハシブトガラスやスズメと同様に、都市の環境に適応した種であるといえる。しかし、都市部もドバトにとって絶対安全とはいえないようだ。轢死体(2004.3.5)や、ハシブトガラスに襲われたのか外傷の激しい死体(2002.1.29)が落ちていたこともある。また、まさにハシブトガラスがドバトを襲っている場面を目にしたこともあった(2013.5.11)。



写真17 地上のドバトの群れ(2017.12.15. 第2エリア)

12 ワカケホンセイインコ(輪掛本青鸚哥、インコ科、*Psittacula krameri manillensis*)

本来はインドやスリランカ等に分布する緑色の綺麗なインコである。外来生物の一つであり、ペットとして輸入したものが逃げて野生化したと考えられている。オスには首の周りに黒い帯があるが、若い個体やメスには見られない。「キーッ」と大きな声で鳴きながら飛ぶ姿は特徴的で、スラッと長く伸びた翼と尾羽は他種と見間違えることはない。第3エリアでのみ出現し、都立青山高校校庭のフェンス上やその周辺の樹木、神宮球場の照明塔の上などでよく見られる。照明塔の上では、ハシブトガラスとしばしばバトルを繰り返している。



写真18 神宮球場近くの樹上のワカケホンセイインコ(2017.3.24. 第3エリア)

以上、第1節で取り上げた12種について、その主な出現場所をまとめたものが、以下の表1、2である。

表1 神宮外苑での出現頻度が高い鳥類種における主な出現エリア

鳥類種	第1エリア	第2エリア	第3エリア
1 キジバト		○	◎
2 オナガ			◎
3 ハシブトガラス	◎	◎	◎
4 シジュウカラ		○	◎
5 ツバメ	◎	○	○
6 ヒヨドリ	○	○	◎
7 メジロ			◎
8 ムクドリ		○	◎
9 スズメ	◎	◎	◎
10 ハクセキレイ		◎	○
11 ドバト	◎	◎	◎
12 ワカケホンセイインコ			◎

◎: よく見られる種 ○: たまに見られる種 (上空通過も含む。)

表2 神宮外苑での出現頻度が高い鳥類種における出現環境条件

鳥類種	路上	建築物上	街灯上	フェンス上	照明塔上	樹上
1 キジバト	○		○	◎		◎
2 オナガ				◎		◎
3 ハシブトガラス	◎	◎	◎		◎	◎
4 シジュウカラ				○		◎
5 ツバメ		◎		○		
6 ヒヨドリ		○		◎		◎
7 メジロ				○		◎
8 ムクドリ	◎	○		◎	◎	◎
9 スズメ	◎	◎	◎	◎		◎
10 ハクセキレイ	◎	○				
11 ドバト	◎	◎	◎	○		
12 ワカケホンセイインコ		○		◎	◎	◎

◎: よく見られる種 ○: たまに見られる種

第2節 出現頻度が低い鳥類種

調査地内と本校の敷地内で観察された19種のうち、比較的に出現頻度の低い7種について、その観察状況と各種の特徴を次に紹介する。7種中3種は、通勤時の調査ルートにおける記録ではなく、本校の敷地内で確認した鳥類種である。また、それらの中には、私が散歩がてらバードウォッチングすることがあるイチヨウ並木で確認したものも含まれている。タイミングが

合えば、調査ルートに出現する可能性が高い種である。なお、第1節同様、「日本鳥類目録」(日本鳥学会)の記載順で記す。

1 カワウ (河鵜・川鵜、ウ科、*Phalacrocorax carbo*)

全身黒っぽい大型の水鳥で、上野の不忍池など東京都内でも局地的に繁殖している。2003.3.1、同じく4.4、2013.1.24に、いずれも1羽が第3エリアの上空を通過している。

2 アオサギ (青鷺、サギ科、*Ardea cinerea*)

翼開長(両翼を広げたときの長さ)が160cmと、日本のサギ類の中で最も大きい。体色は白、青灰色、淡灰色が混じり、翼の半分ほどが黒いため、飛翔中のコントラストが強い。

厳密に言えば通勤時の調査ルートでは観察例がないが、2014.4.8には始業式中に1羽が校庭上空を通過した。また、2016.5.21にはイチョウ並木にて1羽、上空通過を確認している。

3 コゲラ (小啄木鳥、キツツキ科、*Dendrocopos kizuki*)

ほぼスズメ大の、日本最小のキツツキである。「ギーッ」と、錆びた扉をこじ開けるような低い声で鳴く。頭と体の上面は黒褐色で、背中と翼に白斑があるのが特徴である。自然度の高い環境を好む種であり、神宮外苑での観察例はまだ極めて少ない。

2002.5.22、神宮球場入り口そばの樹木に1羽が飛来したところを確認した。

4 ジョウビタキ (尉鵯・常鵯、ヒタキ科、*Phoenicurus aureus*)

冬鳥として渡来する種である。オスとメスとでは体色が異なる。オスは頭が灰白色で顔から喉が黒く、胸から腹の橙色が目立つ。一方メスの体は灰褐色で、下腹部が橙色である。

本種の通勤時の記録はない。1999.10.23、クラスの生徒が、「外苑前駅から学校に来る途中で鳥を拾った」と言ってもってきた。それは、ジョウビタキのメスであった。外傷もなく、生きていたので、そのまま生物実験室でしばらく保護することにした。そのジョウビタキは、幸い少し弱っていただけのようであった。当日の昼頃には回復して飛び立つ様子を見せたために、外へ放してあげた。

5 シロハラ (白腹、ヒタキ科、*Turdus pallidus*)

冬鳥として渡来する。オス、メスとも全身ほぼ褐色で、腹部は淡い。メスは頬や喉に白色が混じる。

シロハラも、厳密には調査ルート内での記録はない。2007.11.14、本校の本館校舎5階のペランダで、1羽のシロハラが死んでいた。ガラスに激突した個体と推察される。また、2015.2.13には、イチョウ並木で1羽を確認している。

6 ツグミ (鶇、ヒタキ科、*Turdus naumanni*)

冬鳥として渡来する。頭から背中、尾は褐色で、翼には栗色が混じる。胸と腹は白く、黒斑がある。しかし、栗色部分の広さや黒斑の密度など、体色は個体によって様々である。

1999.1.22に1羽、2000.12.11に4羽、2007.1.18および1.26に各1羽、2011.1.13および2.8に各1羽、2016.2.18に1羽がそれぞれ上空を通過している。また、2005.1.28には、通勤時ではなく朝の立ち番の時に確認した。ツグミは、比較的に開けた環境を好むと思われ、イチョウ並木の入り口付近ではしばしば出現している。例えば、2009.2.4、2.18、2.26、2011.2.21、3.4、3.8、2013.2.7、2.27などの記録がある。なかなか撮影する機会がなかったが、2018.2.17に本校校庭のフェンス上にいた個体を撮影できた(写真19)。



写真19 本校校庭フェンス上のツグミ (2018.2.17)

7 カワラヒワ (川原鶇・河原鶇、アトリ科、*Carduelis sinica*)

スズメやシジュウカラとほぼ同じ大きさの鳥である。体は褐色で、翼の先端と尾は黒い。カワラヒワの最も目立つ特徴は、翼の一部が黄色いことである。特に飛翔中には幅の広い黄帯がよく見えるため、本種だと識別しやすい。

2000.6.8に1羽、2005.4.19に2羽、5.16には1羽、2007.4.6に1羽、9.11には2羽、2017.10.18に1羽を確認した。その他、2012.4.10には出勤後の校舎で1羽、2017.4.11には退勤時に1羽を確認している。

以上の鳥類種について、調査期間のうち1999年(平成11年)から2017年(平成29年)に調査地内で見られた種数を表したものが図2である。これを見ると、例年10~13種が確認され、主要12種がその多くを占めていることがわかる。そのため第3章では、主要12種における調査結果を分析して得られた知見をまとめたい。

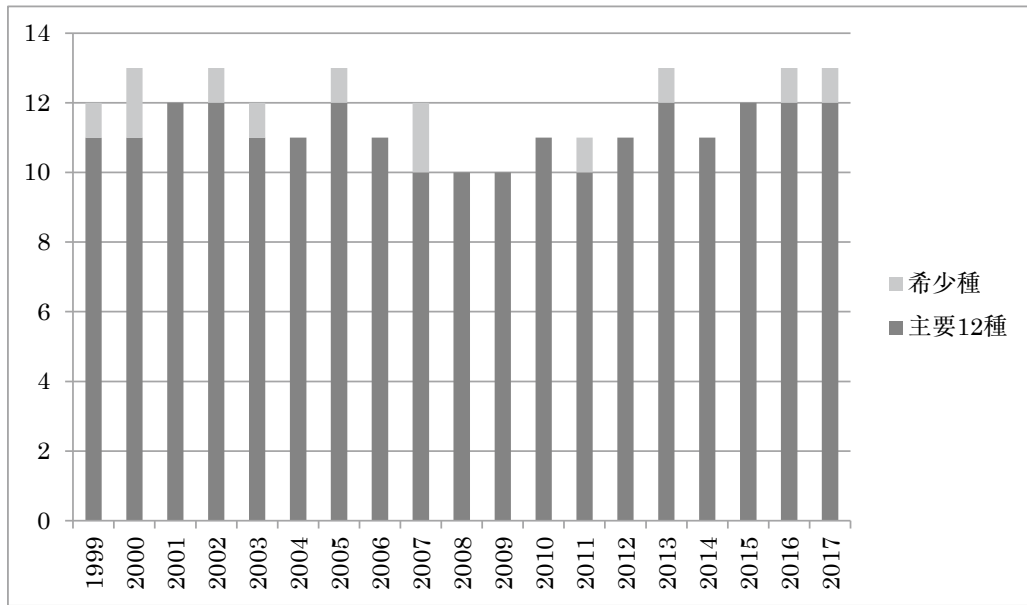


図2 出現種数の経年変化